

ヒンズー社会における「儀礼身分」について： 「Pollution コンセプト」をめぐる若干の理論的整理

岩田，啓靖

<https://doi.org/10.15017/2328742>

出版情報：哲學年報. 27, pp.211-232, 1968-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ヒンズー社会における 「儀礼身分」について

—「Pollution コンセプト」をめぐる
若干の理論的整理—

岩 田 啓 靖

目 次

1. 問 題
2. Pollution コンセプト
3. 儀礼身分の相対性
4. pollution の二類型
 - (a) 永続的 pollution
 - (b) 一時的 pollution
5. 内面的な pollution の強調
6. 結語：儀礼的相互依存関係

(1) 問 題

この小論の目的は、儀礼的純潔と儀礼的穢れに関する一連の信念が、ヒンズー・カースト・システムの基礎的原理として機能しているいくつかの局面を考察し、これに基づいてカーストのステイタス評価に関する若干の理論的整理を行ってみることにある。「浄・不浄」をめぐる Brahmanic な諸概念の遍在は、ヒンズー文化圏内におけるカースト制度の広範な分布とその持続性を説明する一要因である。ここでは、カースト文献に現われたエビデンスによって、「Pollution コンセプト」がカースト・ステイタスに関わっていく仕組を検討し、さし当って、二、三の試論的な概念枠を構成してみたいと思う。もとより、ヒンズー・システムに関する吾々の知識に、

現在なお、多大なギャップがあることは周知に属する。カースト研究の膨大な量にもかかわらず体系的な理論の蓄積にまだ見るべきものがない現状からして、こうした試みが過度な一般化に陥る危険は十分に意識されていなければならない*。したがって、カースト・システムの基盤として以下に提示する概念モデルは、民族誌や社会人類学が報告する多様なデータを必ずしも完全に包摂することは出来ないだろう。また、不十分なエビデンスから無理に理論的帰結を求めることは避けて、情報量の少い領野は意識的に除外された。

しかしながら、カースト・ステイタス・システムに関する予備的な分析を行うことによって、ともかくも、既存の散漫な資料の整理が可能となる。「カースト」の比較研究者が関わっている論争点の一部が明確なものとなるかもしれないし、複雑なカースト現象の体系的把握を果すために、分析的な準拠枠の構成へ向う道が開けるかもしれない。少くとも、それは問題索出のために欠かせない基礎作業であって、Marriott (1959) の云う、カースト・ランキングの“interactional theory”にコンテキストを提供する“attributional theory”へ向っての、ささやかな貢献が期待されている。

* この点に関して Redfield と Singer (1955) が次のように述べている。「インドにはおよそ50万の村落がある。ここで吾々の取扱っている村落がその代表的サンプルだと主張するのは愚かなことである。……いったい、なにが各々の村落に特異なものであるか、あるいはなにがその地域の特徴なのか、あるいはまた、インド全体にわたって真なるものはなにかといった問題は、今後には俟つべきことである。人類学者達がインド社会の研究を進めていくにつれて、多数の村落の中から完全な報告の出来るごくわずかな村落を選んだことを正当づけるような科学的手続を鍛えることが、更に一層要請されるようになるだろう。」

(2) Pollution コンセプト

Pollution, すなわち儀礼的な穢れ、をめぐる Brahmanic な諸概念は、ヒンズーの社会成層体系を彼等の宗教体系と結節している (Harper, 1964).

これらの諸概念は、ヒンズー個々人の行動規範、宇宙の構造や来世に関する観念、健康、正義といった広範な領域の中へ深く滲透しており（例えば、Gerth and Mantindale, 1958）、また、「不可触性 *untouchability*」や司祭カーストの別格的分離といった、インド文化によく知られている諸側面に基本的な関わりをもっている（Harper, 1964: 151）。それはまた、カースト分離に対する最も重要な理由づけでもあって（Srinivas, 1952: 26; Hutton, 1946: 115）、カースト・ランキングは、結局、他者との相対的な関係における儀礼的な「浄性・不浄性」の度合いに基づいて決定され、説明され、受容されていくものである*。つまり、異ったカテゴリー・集団間の、あるいはまた、個人と集団の間の儀礼的な身分関係は、純潔と穢れに関わる固有の信念（“Hindu Pollution Concept”）と結びついた一定の行動類型を媒介として設定され、しかも、ほぼ完全にこの行動型の遵守もしくは違反をとおして評定されていくと見なさなければならない（Ketkar, 1909: 21-23; Hutton 1946: 115; Srinivas, 1952: 26）。

周知のとおり、Hinduism は、各種の神格や死霊や精霊を崇拝するそれぞれ異った形式を広範囲に許容しているけれども、儀礼における一定の *orthodoxy* の基準は定めており（Gerth and Martindale, 1958: 117-118）、これが儀礼身分の客観的評価に重要な役割を演じている。ヒンズーにおける「正統」とは、信念内容の理解いかんよりも、むしろ儀礼的な *dharma* の遵守により大きなウエイトが置かれているのであって、Marriott や Harper (1964: 151) が Brahmanism の正統に “*orthopraxy*” という新しい概念を適用しているのも、この事実に気がついていたからである。上級カーストの下限は、*duija*、つまり「再生族カースト」の資格を獲得するためのイニシエーション儀礼である Brahmanic な「入門式 *upanayana*」を禁止することによって明示されている。また、比較的下級ステイタスのカーストのうちのいずれかが、彼等の宗教儀式を “*orthoprax*” な Brahman の様式で、しかも Brahman 祭司の手によって執行することは、儀礼身分の

上昇にとって一つの有効なポイントになる** (例えば, Srinivas, 1962: 42-61).

しかしながら、上級ステイタス・グループの儀礼を完全に、あるいは一部手直した形で模倣することによる儀礼身分の相対的上昇が下位グループによって決意された場合、共同体の残余成員による反作用という観点からしても、その試みの成功は、なんらかの他の手段による儀礼身分獲得のための基礎固めが先行していなければまず期待することは出来ないし、それが正当なものと認められる可能性もない (Stevenson, 1954: 48). そして、ここで他の手段という場合、なかでも最も重要なのは「Pollution コンセプト」の諸理念に順応する行動型の採用とその持続的履行なのである。

* 分析的に見て、ヒンズー共同体内で機能しているステイタス評定のクライテリアは、二つのカテゴリーに分類することが出来るだろう (Stevenson, 1954). すなわち、「世俗的ステイタス」と「儀礼的ステイタス」である。前者は、職業、熟練、財産、土地所有、公職、婚姻慣行、個人的徳行、学歴などの諸基準によって決定されるものであって、パーソナルな世俗身分や、ある場合には、集団に附与された世俗身分さえも、原則として可変的なものだと考えられる。それは、必ずしも誕生の状況によって決定されない獲得的な身分原理であって、ヒンズー社会の日常的諸関係に少なからざるウエイトを占めていることは、多くのフィールド調査によって確認されてきた (例えば, Srinivas, 1955; Dube, 1955; Cohn, 1955; Beals, 1955; Bailey, 1957; Gough, 1960; Mayer, 1960). これに対して、集団相互間の、もしくは集団内部の儀礼身分関係を規定しているものは、ヒンズー文化に特殊な一連の Pollution 観念と結び合った行動類型であって、これが、そしてしかもこれのみが、カースト・ハイエラキーの中に各カースト集団の儀礼的ポジションを位置づけ、あるいはカースト集団内部での儀礼的身分序列を形成していくのである。Stevenson (1954: 46) は、この儀礼的な純潔と穢れに関わる特殊な信念体系を“Hindu Pollution Concept”と呼んでいるが、ヒンズー・システムは、この「Pollution コンセプト」に基づいてのみ概念づけを受けており、これと結びついた一定の行動型の遵守をおとして、各構成単位間の儀礼的距離は社会的に表現され、あるいはまた裁可されている (Srinivas, 1952; Stevenson, 1954). つまり、カースト・ハイエラキーの少くとも概念的な framework は、世俗的な尺度によってというよりむしろ儀礼的な尺度によって構成

されているのである。それはまた、*untouchability* の限界線をマークし、カースト排他主義の最大の原因を形づくっている。

しかし、先にも述べたごとく、アクチュアルな生活場面においては、「Pollution コンセプト」に基づくオーソドックスな儀礼的ハイエラキーに「世俗的な」諸因子がかぶっているのがあって、その理念的な概念体系と現実の諸関係が、多少とも食違ったものになっていることはいうまでもない。Srinivas (1955: 26) はこのズレについて次のようなコメントを行なっている。「そのようなズレは次のごとき事情に基づいている。つまり、ハイエラキーの概念づけにさいしては儀礼的考慮が支配的であるが、他方、カースト間の日常的な諸関係の中では、経済的、政治的、および西欧的な諸ファクターもまた重要な役割を演じている。かくて、貧窮な Brahman 僧侶と裕福な Peasant カースト出身の村長との間の関係は微妙なものとなる。Brahman は村長の世俗的な権力を認めており、また村長は Brahman の儀礼的なポジションに敬意を表しているのである。この地域 (Mysore) の Untouchable 出身のサーバントや小作人は、Peasant カーストのメンバーから劣位者として扱われているが、しかしこの同じ Peasant が Untouchable 出身の官吏に出会った時にはしぶしぶながらも敬意を示すのである。かくして、社会的なパワーには、儀礼的、経済的、政治的、及び “Western” な軸線が存在するのであって、それぞれ異なったカーストに所属している個々人の間の接触のいかなる一点といえども、これらすべての軸線のコントロールを受けている。」

** この点について、Rose (1945: 980) は次のような見解を示している。すなわち、僧侶カーストの儀礼身分は、彼等がサービスを提供する各集団の儀礼身分と密接に結び合っており、かくて、もしあるカースト集団が自らのステータスを失うと、その集団に奉仕している僧侶集団もまた、ただちに両者の関係が切断されないかぎりステータスのロスを招来する。故に、ステータス・クライテリアの一つとして集団の儀礼に Brahman が参与することの価値は、Brahman 集団の高級なグループ・ステータスに依拠していると見なければならない。この Rose の見解は、ヒンズー・ステータス・システムがその相対的身分評定の基点を Brahman カーストに置いていること、つまり、Brahman からの儀礼的距離によって残余集団の相対的なポジションが査定されていくという仮定を支持するものである。

「Pollution コンセプト」として包摂される諸信念の体系的な検討は、まだほとんど報告されていない。民族誌的データの総量は少くないが (Hutton, 1946: vii), すべては断片的、部分的な資料の未整理な束であるにすぎず、

インド全域におよぶような一般理論の確立を早急に期待することは出来ないだろう。サンスクリット聖典に、その根拠が置かれていると見なされる (Piggott, 1950: 68; Hutton, 1946: 155), 人間のエミッションズに関する諸観念のごときは、インド全域をつうじて一般に認められているようである。ところが反面、獣肉や魚介類を食べることの可否に関係している観念などは、地域的に相当のバリエーションを示している (Hutton, 1946: 64) と云われるし、また、pollution に関する信念の強度そのものにも、インド半島の南部から北部へかけて著しい傾斜があると指摘されている (Ghurye, 1932: 8; Hutton, 1946: 62-63, 69)。しかしながら、このようなローカル・バリエーションは質的な異りというより程度の問題であって (Stevenson, 1954: 48), 儀礼的な純潔と穢れに関する信念の内容は、ヒンズー文化圏をつうじてかなりの斉一性を保持しているように見える。また、若干の権威は、「Pollution コンセプト」の行動面への現れは分析を不可能ならしめるほど錯雑したものと見ているが (Ketkar, 1909: 112; Ghurye, 1932: 1; Hutton, 1946: 41), それでも、この種の行動は一定のパターンのもとに包摂されており、しかも、ヒンズーのあらゆる生活領域やあらゆる構造的レベルにおいてステイタス評定に及ぼしているその効果という点からすれば、そこから一定のコンシステンシーを抽出することが不可能だとは思われない。いいかえれば、pollution に関する諸信念には特定の共通な核が存在しているのである*。

グループの行動類型をとおしてその生得的な儀礼身分の評定に関わっているこの中核的な共通信念を、ここでは便宜的に、四つの原則として提示する。

〔第一原則〕：生命現象はすべて神聖な対象である。したがって、例えば漁師や菜種搾りのごとき生計のための生命の破壊は、不浄である。牛はあらゆる生きものに抜きんでて神聖であり、これを殺傷すること、その皮を糶したり、売買したり、あるいはその肉を食用にすることは、極度

の pollution を生起する。また、牛以外の特定動物種—ある種のモンキー、コブラ、リス、など—は、地域によって種類も異り、その度合いも変るが、やはりきわだった神聖性を具備しており、これらを殺傷したり、食用にしたりすることは不浄である。

〔第二原則〕：死及び腐敗は不浄であり、これと関わり合う人間、職業上の関連をもつ集団を不浄にする。

〔第三原則〕：人間の肉体から分離されたすべてのエミッションズは不浄であり、したがって、これらと職業的に関係する集団もまた、不浄である。

〔第四原則〕：アルコールの飲用は不浄である**。

* 先にも触れたごとく、下位グループによってその儀礼身分の上昇的変更が企画された場合、彼等は、一定の orthoprax な Brahman 儀礼を導入することによって最終的にその意図を完遂する。しかし、この最終目標に到達する過程で自らの集団の行動類型を修正する長期間の労苦多き努力が要請されることはいうまでもない。この場合、そうした行動型の修正・改変を実現していく仕方がインド全体にわたってきわめて斉一な姿を示しており、それに従って行動型が修正されていく基準も一定の狭い範囲内にとどまっている。例えば、スティタスの上昇を志向する集団が、ある種の「下等な職業」を放棄し、牛肉食や豚肉食を廃止し、またアルコール性飲料のたしなみをやめる仕方が報告されている (Lacey, 1933: 267; Srinivas, 1952: 30; 1962: 42-62)。これは、pollution に関する諸信念の中にコンシステントな中核が存在しており、それがヒンズー・システムの頂点から底辺にいたる全構成メンバーに受け入れられているという事実を例証している。

** アルコールの飲用は、ヒンズーのスティタス・システムの中で明らかに polluting criterion として効いている。だが、その根拠がはっきりしない。Stevenson (1954: 55) によれば、アルコールの polluting な性格は、本質的な不浄性に基づくものではなくて、アルコール飲用と禁制や自制心の欠落との間の関係に基づくものだという。なぜならば、自制は靈的解脱に至るヒンズー教徒の主要な mārṅa (道程) の一つであって、自制心に対する脅威であると同時に、靈的救済への脅威となる。なお Srinivas (1955: 21) の報告によれば、西欧から輸入されたアルコール飲料が一部の富裕な階層でたしなまれているが、これは不浄性の対象としては働いていないという、

(3) 儀礼身分の相対性

このような「Pollution コンセプト」が、その細目にわたる変種にもかかわらずともかくヒンズー社会の基礎的な身分原理として遍在していることは、インド全域にわたるカースト・ステータス・システムの一般的枠組にかなりの形態学的斉一性を結果している。一方に、多かれ少かれ orthoprax な Brahmanism と固く結びついた上級身分集団があり、他方に “Untouchables” と目される極度に下級な身分集団が位置している。そして、この両端の間に、数千に及ぶ内婚・共食的なカースト集団が配列されているのであるが (Ketkar, 1909: 81; Rose, 1945: 979; Hutton, 1946: 27), しかし、各集団のステータスは常に相対的なものであって、地域によって大幅な変種が観察されている (Hutton, 1946: 67, 98)。例えば、上級身分集団のメンバーが獣肉食を行ったとしても、彼等が野豚や猟鳥を食べる比較的上級身分集団の Rajputs (Hutton, 1946: 67) や、あるいは肉食慣行をもつ Brahman グループ (Ghurye, 1932: 26; Srinivas, 1952: 28) と共に地域共同体を構成している場合、これによって自らの相対的なローカル儀礼身分を失うことはない。つまり、orthoprax な Brahmans がヒンズー・ステータス・ハイエラキーの頂点を占め、道路掃除人がその対極を占めているのはまぎれもない事実であるが、一方、中間的な残余の諸集団を、ロカリティを超出して一般的な妥当性をもつようななんらかの身分秩序の中へアレンジすることは不可能な企てである。要するに、固定した、永続的なカースト・ハイエラキーなどというものは、どこにも存在しないのである*。集団の儀礼的なステータスは、世俗的なそれと同じように可変的なものであって (Srinivas, 1962: 42-62), 「Pollution コンセプト」に由来する身分原理のあれこれ異った組合せや、それを遵守していく様式が、その組合せの性質や実践の徹底度に応じて、各種レベルでの儀礼身分を相対的に確立していくのである。したがって、ある特定身分集団が自らの集団

身分を改善して、ローカルなスティタス・ハイエラキーの中での相対的なレベル・アップを果すことは、それが数世代にわたる時間幅の中でしか出来ないことだとしても、ともかく可能なことなのである。そして、儀礼身分の上昇的モビリティを結果するためには、そのファースト・ステップとして、「Pollution コンセプト」に照して不浄と見なされているような特定の行動型の実践を回避しなければならない。それ故、ヒンズーの儀礼的なスティタス・システムを理解するためには、どのようなパターンの行動が忌避されているかを知らなければならない。換言すれば、Radcliffe-Brown (1952: 134-135) が “ritual avoidances”, すなわち「あるルールの違反は、違反者の儀礼身分に望ましからざる変更を結果するだろうという信念と結びついた行動規則」と呼んだものについての検討が必要である。

- * これが、ヒンズー・カースト・システムの研究に varṇa 概念を使用することの危険性を示唆する。「カースト」を、本稿でもその立場をとっているように、「内婚的・共食的・職業専門単位」として規定するときは、むしろカースト集団より jāti 集団を指している。正確には、カーストと jāti は異なった構造レベルで機能している概念であって、jāti はしばしば「サブ・カースト」と同一視されている。varṇa 及び jāti 両概念に関する詳細な検討が山折哲雄 (1964: 47-62) によって行なわれている。

(4) Pollution の二類型

Srinivas (1952: 107) は、少くとも人間対人間の接触場面では、儀礼的穢れが儀礼的純潔を常に圧倒するという顕著な事実に着目している。儀礼的純潔度の高い Brahman がアウト・カーストのメンバーと接触すれば、一時的に穢されるのは Brahman のほうである。アウト・カーストの成員が浄化されることはない。つまり、人間相互間の接触においては、“impure な状態” が “pure な状態” を危険にし、それに影響を及ぼすことが出来るのである (Dumont and Pocock, 1959: 24)。この信念の社会的効果はきわめて明白であって (Stevenson, 1954; 50)、もし逆に、Brahman と接触

することによって共同体を構成するすべてのメンバーが Brahman の儀礼身分に同化されてしまえば、「Pollution コンセプト」に基礎づけられているさまざまな身分差別が一切消失してしまうことになる。しかしながら、人間と人間以外のもの、もしくは non-human 相互の接触においては、「不浄性」が「浄性」を圧倒するというヒューマン・オーダーの原則が逆転する。Srinivas (1952: 108) によれば、「maḍi (ritually pure) object は、pole (ritually impure) object と接触した場合、必ずしも穢されない。聖別された水をふり撒くことによって儀礼的に不浄な状態にある人や家屋は浄化される」という。Dumont と Pocock (1959: 23-24) は、Srinivas のこの発見を敷衍して次のような一般化を行った。すなわち、人間相互のコンタクトを統御する原則は、人間と物、もしくは物と物のコンタクトを支配する原則には適用されない。これは「儀礼的浄化」の最も一般的な形態においても観察されるところであって、人が沐浴によって不浄性を除去出来るということは、彼が浴びる水の浄性が、彼の身体に付帯している不浄性よりも強力であるということの意味するものにほかならない。かくて、若干の浄化エイジェント——例えば、ガンジスの水とか牝牛の糞の溶液など (Ketkar, 1909: 120; Hutton, 1946: 71-79; Bose, 1951: 115; Srinivas, 1952: 109)——は、個人のパーソナルな pollution を払拭する力能をもつことになる。

しかしながら、こうしたエイジェントの力能は、個人もしくは集団の[・]一時的なステータスの[・]ロスを回復する限りにおいて効果をもつのであって、その個人が社会関係のネット・ワークに包摂されているかぎり、彼がその中に生れついた集団に由来するところの[・]生得的な pollution—集団儀礼身分—を左右することは出来ないし、したがって、彼の集団儀礼身分を改善することもない。

この点に注目することから、pollution を二つのクラスに分類することが可能であるように思われる。すなわち、(a) 永続的な pollution と、(b)

一時的な pollution である。

(a) 永続的 pollution : これは、対応する浄化儀礼を欠いているという意味で、あるいは、なんらかの浄化エージェントによってその状態に影響を及ぼすことが出来ないという意味で永続的なものである。この pollution は、社会集団の各種カテゴリー間の、あるいは人間と自然界の間の、あるいはまた人間と超自然界との間の関係のあり方を規制しているものであって、集団の儀礼身分を査定しかつ固定せしめているものは、このパーマネントな「浄もしくは不浄の度合い」なのである。それは集団相互間の行動様式や態度を条件づけ、通婚資格、調理資格、共食資格、共働資格、礼拝資格等を決定していく (Ghurye, 1932: 6-10; Hutton, 1946: 41ff., 174; Srinivas, 1952: 26; 1955: 20-21; Gough, 1960: 55-56)。永続的 pollution は、身体各部に附与された属性でもある。臍を中心とした上半身は、下半身よりも儀礼的に純潔度の高い状態*にあるとされ (Ketkar, 1909: 119)、これは Barber の爪切りサービスに対する微妙な区別によっても例証されている**。永続的 pollution はまた、物質のもつ本質的な属性の一つでもあって、例えば絹は木綿よりも高い儀礼的純潔度をもっている (Harper, 1964: 54) し、金、銀、真鍮、鉄、陶器の順序で各種器物の材質にも儀礼的な序列がある (Hutton, 1946: 67)。Srinivas (1955: 22) は、貴金属や鉄を扱う仕事、製陶業、籠づくりなどが「Pollution コンセプト」と直接は結びつかない点を指摘して、次のように述べている。「これらの職種が低級であると見なさるべき原理的な理由はない。しかし、これらの職業と、そしてその職業に従事している諸カーストが平等なものと評価されてはいないことも、また事実である。」なるほど、金属労働者の儀礼身分は「Pollution コンセプト」の中核的な諸原理に対してニュートラルなものであることは確かだが、それにもかかわらず、この種の職人集団に明確なステータスの格差が観察されるのは、彼等が取扱っている原料の中に儀礼的な潜在力の差異があることを例証するものかもしれない。さらに、各種器

物、オーナメント、衣服などのあれこれを、上級身分集団もしくは下級身分集団に適合するものとして選択的に配分したり、あるいはさまざまな儀礼場面、生活場面での使用妥当性を決定するのも、これら物質対象内に属性化されている永続的 pollution だと思われる。永続的 pollution は、生物界のハイエラキーにもかかわっている。ある種の樹木、例えば無花実や榕樹などが、とりわけ高い儀礼身分をもつとされ (Hutton, 1946: 92) それ故に祭儀センターとしてしばしば特殊な取扱いを受けている。同じ理由で、tulasi 草 (学名 *Ocimum Sanctum*) などの草木 (Stevenson, 1954: 91-92) が、神聖行事において選択的に使用されている。さらに、動物種も儀礼的資質に基づいて明確な序列づけを受けている。例えば、牛とりわけ牝牛、コブラ、ある種のサルなどは高級な儀礼身分をもっており、他方、この対極に豚とニワトリが位置している (Hutton, 1946: 199; Srinivas, 1952: 27; 1955: 20; Harper, 1964: 155-158)。そして、中間に羊や野豚、野鳥、有鱗魚、無鱗魚などがくる。この生物種に内在している儀礼的チャージの強弱が、とりわけ動物種のそれが、食事慣行をとおしてカースト集団の儀礼的身分に強力な影響を及ぼすのであって、ある特定集団の献立内容は、そのローカル・コミュニティで確認されている生物種の儀礼的ハイエラキーと、当該社会の中でのその集団の相対的ポジションの函数として決定されることになる。永続的 pollution はまた、あらゆる形の人間の放出物 human emissions に内在する属性でもある。息、唾、鼻汁、経血、精液、糞尿、汗、垢、身体から切離された体毛、爪など (Hutton, 1946: 174; Srinivas, 1952: 103; 1955: 20-21; Harper, 1964: 158-161, 167-171) は、若干の最下級カースト・メンバーの瞥見や影 (Ketkar, 1909: 6-23; Hutton, 1946: 63-72) をも含めて、儀礼的純潔にわたるの深刻な脅威であり、かくて洗濯人、理髪人、産婆、道路掃除人、その他個人的サービスと関連しているある種のカースト集団の儀礼身分を限定づけるのである (Ghurye, 1932: 9-12; Hutton, 1946: 86, 180; Ste-

venson, 1954: 51). 最後に、永続的 pollution は、死と腐敗の属性でもある。死と接触するすべての人間は深い穢れの状態を惹起する。家族メンバーや近親者に発生した死は、その関係者達にやはり一時的なステータスのロスの結果するが、このパーソナルな儀礼身分の喪失は適切な浄化儀礼の遂行によって遅かれ早かれ正常な状態に回復するのであって、集団の儀礼身分に生得的な下級評価を附与するものは、死とのコンスタントな職業的接触なのであり、したがってまたそのような行動類型の相続なのである。そして、これが屠殺業者、皮革業者。あるいは埋葬に関わる集団の儀礼身分を“untouchable”なものと定義づける最大の要因となる***。

* ただし、左手に関する制限は別である。南インドで一般的な右道派 balagai, 左道派 edagai の区別と併せて、左手に関わるタブーの意味はなお詳細に考察されなければならない。

** Ketkar (1909: 26) は、Barber カーストが、彼等の奉仕する集団を (i) 髭だけそる人々、(ii) 指の爪も切る人々、(iii) 足の爪をも切る人々、と三分している事実を報告している。

*** このルールは、埋葬儀礼で司祭職を勤める Brahmins にも適用されている (Hutton, 1946: 69)。この種の Brahman グループは、反語的な意味で Mahabrahman (大ブラーマン) と呼びならわされている。

(b) 一時的 pollution : Dumont と Pocock (1959: 18-23) は、Coorg 人の儀礼生活に関する Srinivas (1952) の分析を批判して、彼が、カースト集団に固着している永続的なグループ pollution と、個人生活の危機(死、病気、出産、月経)から派生する一時的な pollution を混同していると論難した。Srinivas (1952: 108) は、「maḍi (purity) 及び pole (impurity) という儀礼概念は、社会構造と密接に関係している。上位カーストのメンバーは、下位カースト・メンバーとの関連において maḍi の状態にあり、後者は前者との関連において pole の状態にある。各階層に所属するカー

スト間には、コンタクトに関する禁制が存在している」と述べているが、これに対して Dumont と Pocock は、カースト集団に附与されている *untouchability* や *pollution* は、その集団が遂行する専門業務に内包された儀礼的機能に由来する回避不可能なものであるのに対し、個人のライフ・クライシスを媒介として派生する *pollution* には、それに対応する一連の浄化儀礼が準備されており、一定の儀礼的手続を踏むことによって排除出来るものであることを指摘した。この指摘は妥当なものであって、*pollution* には二種類の分析レベル—永続的 *pollution* と一時的 *pollution*—があることを示している。

ところで、永続的 *pollution* とは対照的に、一時的 *pollution* は状況的なものである。それは一般に、カースト集団内部での各成員のパーソナルな儀礼身分と結びついており、いかなる儀礼的禁忌が遵守されるべきであり、また、食事の前後*や、家族もしくは近親者に出産、疫病、死などが発生した時どのような儀礼が遂行されるべきか、といった問題を統御するとともに、儀礼的禁制を、随意・不随意にかかわらず侵犯したメンバーに対して、その浄化に必要な一定の手順を指定している。

永続的な *pollution* に対立する一時的 *pollution* の作用の質的な異りは、次のような事例によって明確なものにすることが出来るだろう。比較的上位の儀礼身分集団に所属する A が、*untouchable* カーストのメンバーである B と接触したとする。A は、接触と同時に、彼の所属集団に対して一時的に *untouchable* となり、適当な儀礼の遂行によってステータスのロスを回復するまでは、この状態がつづく。しかしながら、A は所定の手続を踏んで *pure* な状態にたち帰ることが出来るのに対し、B は、儀礼的純潔を彼の生涯のうちでは獲得することが出来ない。つまり、A の *untouchability* は一時的、状況的なものであるが、B のそれは、彼が生まれついたグループに積分されているかぎり、原則として、一生のうちに改変することは不可能なのである。*untouchability* の前者のタイプは、カースト・システムの

中で相対性をもつと共に、彼の所属集団内部での彼の個人的なポジションに相対的な関わりをもってくる。一方、後者は、全体としてのカースト・システムの枠内で、そのステータス・グループの相対的位置を規定することになる (Stevenson, 1954: 52)**.

* orthoprax なヒンズー教徒は、食物の調理及び食事そのものを、儀礼の一種と見なしている (Harper, 1964: 53).

** 前にも触れたように、なるほど、カースト・グループは、実際には、「Pollution コンセプト」に順応する諸禁制をその集団的な行動型の中へ採用することによって、あるいは、不浄と目されている行動型の相続拒否によって、さらにはまた、Brahmanic な儀礼生活を導入することによって、自らの相対的な pollution の度合いを変化させているし、したがってまた、彼等の相対的な儀礼身分を改変している。しかしながら、そうした上昇的ステータス・モビリティは、数世代にわたる忍耐強い努力を前提としてはじめて実現されるものであり (Srinivas, 1962: 42-62)、一般のヒンズー個人にとって、自分の生涯の中で取除き得る pollution と、数世代にも及ぶ時間幅の中ではじめて除去され得るような pollution では、全く異なった意味をもつはずであり、この二種類の pollution が個人に反作用する様式も、分析的には、別の次元でとらえるほうが妥当だと思われる。他方また、集団身分の下降的なモビリティは、不浄度の強い食慣行の採用や、同じく不浄と目されている職業に従事することで、急速に招来することが出来る (Ketkar, 1909: 20-21)。しかしこの場合もまた、個人によるパーソナルな儀礼身分の一時的なロスと、グループの儀礼身分の喪失には明らかな区別がある。後者の場合、一旦不浄化したグループが、他集団との相対的関連の中で以前の儀礼身分を回復するためには、おそらく数世紀が必要であろう (Stevenson, 1954: 52).

(5) 内面的な pollution の強調

儀礼的純潔と穢れに関して、いま一つの注目すべきポイントがある。それは、儀礼的身分評定のメルクマールとして、さまざまな儀礼的禁制の中でもとりわけ、食事規則と通婚規則が強調されている事実であって、カースト集団—jāti—が実質的には「共食・内婚単位」として定義づけられるのも、この二つのファクターに対するヒンズー社会の深い関わり合いを示し

ている。食物と水に関する複雑な禁忌の分析をとおして、Stevenson (1954: 52-65) は、ヒンズーの儀礼身分が三つの異った構造レベルをとおして社会的に活性化していると主張した。三つの構造レベルとは、(i) 共食・内婚的なカースト集団—*jāti*—のレベル、(ii) 外婚的な *leneage—gōtra*—のレベル、そして (iii) 個人のレベル、である。そして彼は、すべてのヒンズーが三つの同心円的な食事禁制にとり囲まれている様子を詳しく説明して、通婚を正当化する儀礼身分の等価性が、共同食事を正当化する儀礼的資格の共有に条件づけられていることを示唆した。しかし、この問題領域がカースト・システムの理解にとつて枢要な部分であるにもかかわらず、まだ、一般化を行うに足る情報の集積がないように思われる。吾々が入手出来る知識にはいたるところに大きなギャップがあるため、このテーマは後日の検証に委ねるほうが賢明であろう。

ただし、食事慣行と通婚規則が儀礼的禁忌の中核的部分であるという事実から、以下のような仮定が生れる。すなわち、食事もしくは性交渉によって結果される *pollution* は、肉体の内部に深く滲透して、外的、表面的な皮相接触によってもたらされる *pollution* に較べはるかに深刻な儀礼的危機を招来する。したがって、このような“深い”接触を回避して内面的な穢れから自らの儀礼身分を防護することは、すべてヒンズーたるものにとってのなみなみならぬ関心事でなければならない。この仮定が正しければ、吾々は *pollution* に関していま一つのデイコトマス・カテゴリーを設定することが出来るだろう。つまり、(1)外的 *pollution* と(2)内的 *pollution* である。

食事と性関係に関わっているさまざまな儀礼的禁忌は明らかに第二のカテゴリーと結びついているが、これは外的接触にもとづく皮相な *pollution* とは異ったオーダーをもち、しかもはるかに危険なものだと見なされている。その事実は次のようなエビデンスによって示される。まず第一に、食物と飲物を媒介とする *pollution* の危険が極度に強調されているが、これ

ら両者はともに肉体の内部で吸収される。わけても水は、それが外面的に用いられる場合と、内的に滲透せしめられる場合では、全く対照的な効果を示す (Stevenson, 1954: 57)。水は最も有力な pollution 伝導体であるとともにきわめてポピュラーな浄化エイジェントでもあって、人間の肌や衣服や果物の表皮などから pollution を洗い流すために用いられる。ところが、その同じ水がミルクを薄めるためや調理に用いられると、そうした飲食物の中へ鋭敏に pollution を持込ことになる (Hutton, 1946: 64-65)。ほぼインド全域にわたって、食物は三つのクラスに分類されている (Ghurye, 1932: 8-9; Hutton, 1946: 64-65)。(i) 果物のごとき生鮮食品 (ii)、水で調理された食品 (kachcha), (iii) ghi (浄化されたバター) で調理された食品もしくは火や油で炒りあげた食品 (pakka), であるが、このうち kachcha が最も大きな pollution の伝達可能性をもつとされ、それ故に厳格な禁制によってその授受がコントロールされている。一方、ghi によって調理された食品や火で炒りあげられた食品は、かかる浄化エイジェント (ghi もしくは火) の内的滲透によって、pollution の伝導性を比較的減少せしめられているものと思われる。次に、肉食に関わる食事禁制は、野豚や猿鳥に較べて豚やニワトリを不浄度のより高いものと見なしているが、これは、後者が人家の周辺で汚物や糞尿をあさることにより、内的に穢されているためである (Srinivas, 1955: 20)。第三に、食器や什器類は、その材質の多孔性と pollutability との間に顕著な相関をもっていると考えられている。多孔質の材料で作られた食器類は、その無数の細孔から不浄媒体を内的に滲透せしめる可能性があり、そのために外面的な洗滌では除去し得ない pollution を結果すると見なされるのである。第四に、ステータスを横断する性的交渉は、当該の男性と女性、及び彼等の子孫の儀礼身分に異った仕方では、深甚な影響を及ぼすという事実がある (Stevenson, 1954: 57)。ある男性が、下位集団に所属する女性を情婦もしくは妾としてキープすることは一般に認められている。その場合、男性

は接触の後で一定の沐浴儀礼を履行しなければならないが、原則として、それ以上の浄化手続は要求されない*。しかしながら、自分より下位のスティタスに所属する男性と性交渉をもった女性は、ただちに彼女のスティタス・グループから追放されなければならないのである。前者の型の結合 (anuloma 婚) によって産れた子孫は、選択的な結婚を数世代にわたってつづけることにより、彼等の父系祖先の儀礼身分に復帰出来るのだが、後者 (pratiloma 婚) の子孫はアウト・カーストになる (Srinivas, 1952: 30)。下位スティタス・パートナーとの間の性関係が、上位集団の当事者に pollution を結果するとすれば、それは男性にも女性にも同じ状況である。ところが男性に対しては、ほとんど黙認に近い寛大さが示され、女性の側へは苛酷なペナルティが課せられる。この事情を Stevenson (1954: 57) は次のように解釈している。つまり、性交渉において “polluting secretion” を放出するのは男性であり、それを内的に受容するのは女性である。男性はただ外面的、皮相的に pollution に暴されるだけであって、これは沐浴で除去することが出来る。これに対して、当該の女性は pollution をダイレクトに、しかも内的に伝達されるため、彼女が下位スティタスのパートナーによって蒙らしめられた儀礼身分のロスは、いかなる手段によっても回復することが出来ないほど深刻なものとなる。一時的なスティタスの喪失を適切な浄化儀礼によって復元出来る場合には、決つて成員権の剝奪という徹底した処置はとられない。ところが、肉体内的な、深い汚染は、外的な汚染に対して有効だった浄化儀礼の力能を凌駕し、当該女性のパーソナルな儀礼身分を永遠に貶価してしまうだろう。彼女の所属グループは、ただちにこの儀礼的資格において不等価なメンバーを排除して、自らの集団儀礼身分を保護しなければならない。つまり、性的禁忌が女性のサイドにきわめて厳格である理由の一半は、内的な pollution が、外面的、皮相的なそれとは異質の儀礼的状況であって、ヒンズーにとってより脅威的な危険なものと理解されていることにある、

こうして、内面的・肉体的 pollution の除去不可能性はいろいろな側面から強調されている。いかなるグループといえども、この内的汚染を払拭するためには数世代にわたる改変された行動類型の遵守を必要とするであろう (Srinivas, 1952: 30) し、イスラムやキリスト教へ回心した者でさえ、しばしばこの信念には固執しているともいわれる (Hutton, 1946: 178)。

- * この場合、上級ステータスの男性は自らの性的パートナーである下級ステータスの女性から、食物と水を決して受取ることはない。性交渉は、男性にとって外的な pollution、したがって一時的、除去可能な pollution を結果するだけであるが、飲食物の受納は内的 pollution の原因となるからである。

(6) 結 語：儀礼的相互依存関係

ヒンズー社会には、各種の儀礼的禁制と結びついた行動類型のシステムがあり、こうした行動型の遵守によって表現される儀礼的なステータス・ハイエラキーが存在している。この事実は、おそらく次のような概念モデルに基づいて解釈出来る。

- A—ヒンズー共同体の儀礼的、世俗的な福祉は、共同体に関わっている各種レベルの神々や神格によって直接保証されるか、あるいは、そうした超自然界のサポートによって実現される。したがって、神々を宥和しこれを礼拝することは、共同体にとっての第一義的な関心事であり、そうした献身と引替に超自然界は人間に各種の便益をもたらす。
- B—神々の直接的な礼拝は、高度な儀礼的純潔を保持する人間によるのみ、可能である。
- C—かくて、当該共同体は、超自然界とのコンタクトを担当する成員に可能なかぎり高い儀礼的純潔を保証し、これを保護していかなければならない。
- D—ところが、社会的諸目標が達成されるためには、その行為に従事するメンバーを不浄たらしめるような多くの行為も遂行されなければならない。

い。上記の目的を達するためには、結局、選ばれた成員をこうした pollution の可能性から隔離し、共同体の残余のメンバーが、特定の儀礼的に不浄な諸行為を代行しなければならないことになる。

E—つまり、神々へのアプローチを専門職とするグループに、その職能遂行に必要な儀礼的資格を保証するためには、自らの儀礼身分を不浄たらしめるといふ犠牲を払ってでも、さもなければ祭司グループに生起するであろう pollution を肩替りする若干のグループを設定することが、共同体的な要請となる。かくて、祭司カーストが神々を礼拝するに足る純潔を獲得・維持することを助けるのは、残余カーストの義務となる。

F—共同体の全成員は、一般に最高位の儀礼身分を保守する人々によって直接神々に向けられた礼拝から利益を得るのであるが、個別的な意味では、そうした宗教専門者へのサービスを媒介にして間接的に神の恩寵にあずかる人々が、下級身分集団を構成することになる。

G—超自然界やあるいは純潔度の高い成員に対して儀礼的浄化の役割を担うためには、その役割分担者が相対的にみてもわずかだけ純潔度の低いステータスに自らを維持している必要がある。儀礼的距離が極端になると、上級ステータスの成員から比較的軽度の pollution を肩替りする能力を失うことになるため、中間位ステータスに所属する成員は、自らの儀礼的ポジションが更に下落することを防がねばならない。こうして、中間位ステータスの成員に代って極度な pollution を伴う役割を引受けていく、一層純潔度の低いステータス・グループが設定されることになる。

H—儀礼的な pollution は、一定の血縁的諸関係を通して伝達、世襲されていく。このため、全体社会は kinship に基づいた儀礼的身分集団に分割され、しかもその各々は上述の如き浄・不浄コンティニュームの尺度の中に序列づけられねばならない。

かくて、ヒンズー社会は、各種レベルの神格や精霊に向けられた共同体的サービスの遂行をめぐって組織された儀礼的なシステムをその中核として

あり、カースト集団による社会・経済的諸活動の分割的な引受け—カースト分業—も、元来は、儀礼的な適格・欠格条件に結びついた役割機能と関わるころの儀礼的相互依存関係に由来するものと推定される。

参 照 文 献

- Bailey, F. G. (1957): *Caste and the Economic Frontier*, Manchester University Press.
- Beals, A. R. (1955): "Interplay among Factors of Change in a Mysore Village", Marriott, ed. *Village India*, 78-100.
- Bose, Nirmal Kumar (1951): "Caste in India", *Man in India*, vol. 31, 107-123.
- Cohn, B. S. (1955): "Changing Status of the Depressed Caste", Marriott, ed., *Village India*, 53-76.
- Dube, S. C. (1955): *Indian village*. London.
- Dumont, L. and D. Pocock (1959): "Pure and Impure", *Contributions to Indian Sociology*, no. 3, 9-39.
- Gerth, H. H. and D. Martindale (1958): *Max Weber— The Religion of India*. The Free Press.
- Ghurye, G. S. (1932): *Caste and Race in India*. London.
- Gough, E. K. (1960): "Caste in a Tanjore Village", Leach, ed., *Aspects of Caste of South India, Ceylon and North-West Pakistan*, 11-60.
- Harper, E. B. (1964): "Ritual Pollution as an Integrator of Caste and Religion", *The Journal of Asian Studies*, vol. 23, 151-197.
- Hutton, J. H. (1946): *Caste in India*. Cambridge University Press.
- Ketkar, S. V. (1909): *History of Caste in India*, 2vols. New York.
- Lacey, W. G. (1933): *Bihar and Orissa. Census of India, 1931*.
- Marriott, M. (1959): "Interactional and attributional theories of caste ranking. man in India, 39, 92-107.
- Mayer, A. C. (1960): *Caste and Kinship in Central India: A Village and its Region*. London.
- Piggott, S. (1950): *Prehistoric India*. Penguin Books.
- Radcliffe-Brown (1952): *Structure and Function in Primitive Society*. London.
- Redfield, R. and M. Singer (1955): "Foreword" of *Village India*, Marriott, ed., vii-xvi,

- Rose, H. A. (1945): "Caste" (Indian), *Encyclopedia Britannica*, IV, 976-986.
- Srinivas, M.N. (1952): *Religion and Society among the Coorgs of South India*. Oxford.
- (1955): "The Social Structure of a Mysore Village", Marriott, ed., *Village India*, 1-35.
- (1962): "A Note on Sanskritization and Westernization", *Caste in Modern India and Other Essays*. London, 42-62.
- Stevenson, H.N.C.: "Status Evaluation in the Hindu Caste System", *Journal of the Royal Anthropological Institute*, vol.84, 45-65.
- 山折哲雄(1964): "Varṇa と Jāti—カースト形成の背景", *鈴木学術財団研究年報*, No. 1, 47-62.